Peshawar-kai

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル603号室
TEL 092（731）2372
FAX 092（731）2373

No.87
2006年4月1日

〈URL〉 http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/　〈E-mail〉 peshawar@kkh.biglobe.ne.jp ＊アドレスが変わりました

表紙絵　羊番（画・甲斐大策）

第二次灌水目前、現場には活気が漲っています	中村　哲
困難乗り越え成長するＰＭＳ	後藤哲也
苛酷で不思議な「非日常」です	横山尚佑
木を育てつつ、人も育てば……	神戸秀樹
結核コントロールプログラムと検査室	坂尾美知子
診療所敷地から一歩も出ない月も	紺野道寛
振り返れば充実した「地下室」の五年間でした	中山博喜
子供たちとの触れあいも大切な時間です	伊藤和也
アフガン版「竹取物語」(1)	鬼木　稔
緑の谷と化すダラエヌール	安藤由貴子

ペシャワール会は、1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

第二次灌水目前、現場には活気が漲っています

PMS（ペシャワール会医療サービス）総院長　中村哲

用水路はブディアライ村に到達

今、用水路建設現場のアフガン人職員たちの間で、静かな気迫がみなぎっている。着工からまる三年、技師たちの殆どが辞職する中、残って黙々と働いて辛苦を共にした職員たちが、やっと今年度の目標地点に到達しようとしているからだ。

第一期工事一三キロメートルのうち一〇キロ地点で、用水路は目標のブディアライ村に入る。そうすると、旱魃で砂漠化した台地の大半を潤すことになる。今年度初め、二〇〇五年五月に四八〇町歩の第一次灌漑を達成し、まもなく第二次、数百町歩が更に加わることになる。それが一週間後に迫っているのである。

しかも、これまでと異なるのは、アフガン人職員自ら休日を返上して、一種の熱気が彼らを支配していることである。彼らが自ら進んで突貫工事に邁進する姿は今まで稀であった。しかし今、作業員も職員もはつらつと仕事を進めている。

これには日本で余りに知られていない背景がある。現地で進行する大旱魃は半端なものではない。大部分が農民である難民は増えに増え続け、現在パキスタンには三百万人が居ると発表されている。この数は〇二年の「アフガニスタン復興支援ブーム」の時の二百万人をはるかに超えている。政治現象や演出された「復興」をよそに、難民は増えているのだ。

アフガン空爆以後、人々は苦々しい思いで、一連の出来事を眺めてきた。とくに復興支援で落ちる外貨に浴さない貧しい農民たちはそうである。昨年WFP（世界食糧計画）は、かつて一〇〇パーセントに近かった食糧自給率が六〇パーセントを下回ると警告した。だが、今年の冬の降雨量は異常に少なく、旱魃はさらにひどくなると予想されている。食糧すらまともに生産できないのに、復興支援のカネだけがだぶつく。当然、諸物価が高騰し、治安悪化がこれに拍車をかける。加えてイスラム諸国の暗いニュースは、敬虔なイスラム教徒である現地の人々を気落ちさせる。

十数万人分の食糧生産を射程に

このような中で、「アフガン問題は先ずパンと水の問題である」と訴え続けてきた私たちPMS（ペシャワール会医療サービス）にとっても、用水路建設は要の事業であった。数え切れぬ苦労の末、広大な面積が灌漑に浴し、人々は沙漠が緑の耕地に変貌する姿を実際に目撃した。多くの難民たちが帰農したばかりではない。三年間関わり続けた職員たちもまた、この仕事に精神的なよりどころを見出したと言っても過言ではない。

これに嬉しいおまけがあった。建設中の用水路の下手に、「シェイワ・カナール」という古い用水路がある。昔から二千町歩の広大な耕地を潤してきたこの水路は、北部ニングラハル州最大のも

第一次の灌漑地では田畑の造成が進み、続々と民家が建ち並び始めた

のだった。ところが、昨年夏の大洪水で取水口が破壊され、冬場の取水が困難になった。我々PMSが助力しても、やっと例年の水量の半分を確保できたのみで、小麦の生産に大打撃を与える寸前だった。そこに、私たちPMSのマルワリード（真珠）用水路の余水が流れ込み、例年並の小麦収穫を確保した。現在、同水路の約五〇パーセント以上の水量が私たちの水路のものである。しかし吾が用水路の能力は、これだけを潤して、予定送水量の五分の一にも満たないので、図らずも「数千町歩の灌漑、十数万人分の食糧生産」が、決して夢でないことが実証された。

用水路は10キロ地点を掘削中

灌水目前、地元に活気

三月一五日、新たに通水した場所から灌漑ができる村の住民に「一週間で水を送る」と通告、残り一キロメートル地点に全ての作業員と重機が殺到した。作業員といっても殆どが周辺農民である。枯死寸前の小麦畑への灌水がどれほど重要かをみな知っている。今から一ヶ月の灌水が収穫の成否を決定する。彼らが再難民化するかどうかの瀬戸際なのである。みな固唾をのんで見守り、たいていの人々は快く協力を申し出る。オンボロの重機と、埃まみれの作業員、一見粗野でみすぼらしくとも、吾が用水路建設班の一団は、すばらしく活気にあふれて頼もしい。

これまで灌水した約五百町歩は、既に一面の緑の畑で埋め尽くされ、水路沿いに植えた数万本の柳の新緑が陽に映えて美しい。日本から助っ人にかけつけた若者たちも、真っ黒に日焼けして別人のようにたくましく、現地に溶け込んでいる。

たまに日本のニュースを聞くと、現地と余りに対照的で、別世界のようだ。それが何なのか、深く考えたことはなかったが、作業現場にいると分かるような気がしている。造花と野草の相違のようだ。ここにはパソコンはおろか、電気もテレビもないが、逆に情報の洪水に惑わされることもない。人と人、人と自然の関係も、直接かつ単純である。こちらが胸を開けば相手も開く。争いも多いが、温かいふれあいがある。水の恵みをかみしめ、手を汚して土にふれる。一方、日本を見ると、僅かな出来事で一喜一憂、日本人はだんだん気短かで観念的となり、大らかさが減ってきたような気がしてならない。居るには居るが、住みにくくなっているのは事実である。自分を見つめたり、自己主張することで人は救われない。むしろ我執を去ることで得るものが数多あり、道が開けるような気がする。

とまれ、ここには、天の恵みの実感、誰もが共有できる希望、そして飾りのないむき出しの生死がある。

この仕事を支える日本の方々に感謝し、年度末の報告に変えさせていただきます。

中村哲（なかむらてつ）九州大学医学部卒。専門＝神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境州の州都ペシャワールに赴任。以来二十年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧民層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も行っている。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千四百ヶ所以上）事業を実践。さらに二〇〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、二〇〇三年春からはその一環として灌漑水利計画に着手。年間診療数約十三万人（二〇〇四年度）。

●現地活動を視察して

困難乗り越え成長するＰＭＳ

ペシャワール会会長　後藤哲也

灌漑地に建ち並び出した家屋

この度、三月六日より十三日まで、福岡から副会長、事務局長代行と私の三名、関東連絡会の事務局から四名の計七名で現地を訪問し、ペシャワール会の現地に於ける活動をつぶさに見聞して参りました。

ＰＭＳ病院の活動更にはそれを基盤とするアフガニスタンの試験農場、井戸掘り、大規模な水路建設の全てを全部見聞するには時間が足りませんでしたが、院長代理の藤田さん、ジャララバード事務所長の芹沢さん、更には中村哲医師自らの精力的なお世話によりそのほぼ全てを、水路建設に於いては取水口から現在建設中の現場、更にはクナール河対岸の護岸状況までをも見学することが出来ました。かなりハードなスケジュールで朝が早かったのですが、全員病気することもなく事故もなく無事帰国することが出来、このように原稿を書きながらホッとしている所です。

水路現場では既に灌漑が行われている地域が日毎に拡大しています。帰農した農民、新規に開拓者として入ってきた農民達が競うが如くに住居を建設し、畦を作って水を引き入れ、去年までは歩けば足首まで土に埋もれる砂漠だった所が一面の緑。麦の穂が風にたなびく様は水の持つ偉大な力がひしひしと感じられ、その変化がペシャワール会、中村医師ら現地スタッフによってもたらされたことが誇らしく感慨ひとしおでした。

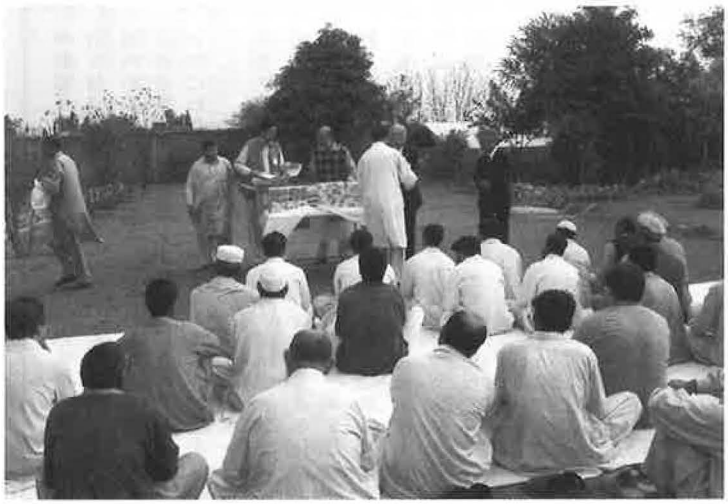
現地理事会で謝辞

さて、今回の訪問には現地から現地理事会への出席、ＰＭＳ病院表彰式への出席、ジャララバード新事務所オープンセレモニーへの出席という三つの公式行事への出席要請があり、全員で出席しました。その内、現地理事会で私が行った挨拶を以下に書かせて頂きます。この全文をニューヨーク在住の沢田裕子さんが素晴らしい英語に訳して下さり、現場では私が日本語で読み、中村哲先生が英語で読んで下さいました。

＊

皆様、今日は。

この度、私たちは、ペシャワール会の現地活動を見学させて頂くために東京から四名、安藤由貴子さん、沢田石君子さん、霜村和子さん、箱木五郎さん、福岡からペシャワール会副会長の井本浩之先生、事務局長代行の福元満治さん、そして昨年からペシャワール会会長に就任した私、後藤哲也の総勢七人で出掛けて参りました。名前は覚えられないと思いますが、どうぞよろしく御願い致します。



ＰＭＳのを表彰式に出席した後藤会長（奥右から二人目）

ペシャワール会は一九八四年に中村哲先生のペシャワール地方での医療活動を支援する目的で結成され、現在では二万人近い会員並びに支援者を擁する大きな会に発展しています。平和と、相互に助け合って生きたいという素朴で純粋な思いを中村哲先生に託しその結実を見ながらここまで大きく発展しました。

その間、当地では僻地診療所開設並びに一九九八年にはＰＭＳ統合病院が建設され、二〇〇〇年から大旱魃に襲われたアフガニスタンの

村々で水源確保の井戸掘りを開始、二〇〇三年三月から灌漑用水路の建設が、様々な困難を乗り越えて進行中です。又農業試験場も着々と成果をあげていると聞き及んでいます。これらはどれ一つとっても、当地の皆様の真摯なご協力がなければ成しえないことばかりです。皆様のご協力に心から感謝申し上げる次第です。

当地におけるＰＭＳ病院の医療活動を中心とし、基盤とした、アフガニスタンの緑化活動や農業活動が中村哲先生を中心としたパキスタン、日本両国ペシャワール会の協調によって順調に進展し、この地にしっかり根付くことが日本ペシャワール会の最大の願いです。とりわけＰＭＳ病院が充実し安定することは我々の最初からの基本的な願いであり、アフガニスタンの諸事業を進める為にも必須であると考えている所です。

この度、我々の思いが皆様の協力によってこのように実現されているのを目の当たりにして、その喜びはこの上ありません。当地の日本人ワーカーの活躍には本当に頭が下がる思いです。日本の事務局も、今日は事務局長代行の福元満治さんが来ておられますが、全くの無報酬で煩雑な仕事をいとわず笑顔を絶やさず仲良くやっておりますのでご安心下さい。

最後に、当地のＰＭＳ病院を基幹とした医療活動やアフガニスタンの緑化活動、農業活動が順調に進展することを再度願って私の挨拶とさせて頂きます。ＰＭＳ病院の若い皆様には是非医療の根幹をしっかり勉強して頂いてそれをパキスタン、アフガニスタンの患者さん達に還元して頂きたいと願って已みません。

古来美しいと云われたペシャワールの地にその最も良い季節に来訪出来たことを感謝しています。有り難うございました。

日本人ワーカーに脱帽

この訪問は現地人スタッフや日本人ワーカーとの交流にも大変役立ったと思います。ＰＭＳ病院の表彰式、ジャララバード新事務所オープニングセレモニーでの表彰式で私が表彰を担当したのですが現地人スタッフと握手するとき彼らの緊張、誇り、うれしさ、はにかみがいちいち伝わって来て、こちらの頬がゆるみがちになりました。

日本人ワーカーの皆様にもこの度は大変お世話になりました。朝五時半に事務所を出て夕方五時近くまで仕事をし、時には休日（現地では金曜日）出勤も辞さず、現地の人と協調しながら仕事を進めるのは大変なことだと感服します。しかも皆短期間の内に言葉も覚えていてびっくりしました。現地での一年の人生経験、特に忍耐は日本の十年分に相当すると思います。それだけの人間的成長が得られると私は確信するに至りました。どうぞ気概と自信を以て日々を過ごされるよう声援致します。

最後になりましたが、ジア副院長、イクラムラ事務長はじめ、終始我々の運転手を務めてくれたドライバーの皆さん他、きりがない位の方々のお世話になりました。心から感謝申し上げ、私の報告とさせて頂きます。

▼寄附をしていただく皆さまへ▼

＊当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、お願いいたします。

▼記入は分かりやすく▼

＊ご寄付をお送り頂いた郵便払い込み用紙は、郵便局からはコピーが届きますので、文字がにじんだり、かすれて判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

▼未使用の切手、ハガキを！

＊会報の発送等の通信費に、年間数百万円かかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。（使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい）

＊一部地域の方々への会報は「料金別納郵便」でお送りしておりますが、その際も料金の代わりとして未使用切手で支払っております。

▼郵送方法の変更について▼

＊一部地域の方々へは発送代行業者を通して別納郵送しております。差出人欄に代行業者名が記載されますのでご了承下さい。

＊ワーカー通信

苛酷で不思議な「非日常」です

灌漑用水路担当　横山尚佑

サイフォン部分の造成を担当

ペシャワール会会員の皆様、初めまして。ペシャワール会現地スタッフの横山と申します。昨年一二月半ば、事務職から灌漑用水路・コンクリート構造物建設担当への転属が決まって三ヶ月、アフガニスタンに初めて足を踏み入れてから半年が過ぎようとしています。事務職の頃は事務所に張り付いている毎日で、用水路建設現場を見る機会になかなか恵まれず、最近やっと用水路事業を理解し始めたというのが正直なところです。

水のない所へ水を引くというこの事業に、しかも最前線の現場担当として参加させて頂き、水は蛇口をひねればどこからか無尽蔵に出てくるものだとどこかで思い込んでいたことにも気が付くことができました。聞く人が聞いたら当たり前のことだと笑われそうですが、日本にいたら絶対に意識しない、できないことの一つだと思います。

今（二〇〇六年三月一〇日現在）はI地区（取水口から約八キロメートル地点）のサイフォンが完成し、その周辺の造成を担当させて頂いております。次はJ地区（取水口から約一〇キロメートル地点）のコンクリート構造物建設が始まります。五月の小麦の収穫前までが完成目標だそうです。いつもの事だとは思いますが、今度のJ地区の工事に対する中村医師の気合に何か鬼気迫るものを感じております。乗り遅れぬよう、迷惑をかけぬよう準備をしている段階です。

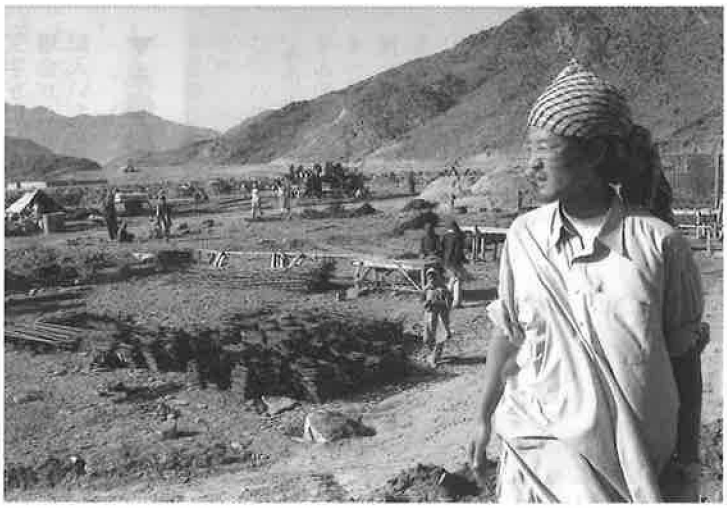
髭面の猛者に囲まれて

さて、先日、この会報原稿を書くにあたり、こちらでの日々を振り返ってみました。どの場面にも必ず髭面の男達が登場して、というより髭面の男しか登場して来ないことに少し愕然としましたが……（当たり前ですが）。事務職時代苦労した車輌のアレンジでは、夜の事務所でドライバー達と笑い話をする事で随分救われました。仕事終了後の食事当番も手伝ってくれるスタッフハウスのチョキダール（門衛）に言葉を教わりながら楽しくこなすことができました。用水路事業への転属後一週間後の朝一番、中村医師の運転するユンボによって突然予告なしに始まった、初の担当現場の掘削は、知識・経験・準備不足の自分にとって一番慌てた出来事でした。

また、今一番の楽しみは毎日の昼飯です。らくだや羊などがパラパラと行き交う作業現場で、レイバー（作業員）と円になって食べます。力仕事の後、ハラペコで食う飯はとても美味しく、皆でがっついています。レイバーはほとんど皆、所謂小作農の人々で、力仕事は生まれた時から当たり前、よく喋りよく笑いよく歌い、男くさいという言葉しか当てはまらない魅力的な連中です。

いつもと違う自分が……

思い出すと何か本当に自分の身の回りで起きて



用水路建設現場で奮闘する横山ワーカー

いた出来事とは思えない、不思議な感覚に囚われてしまいます。少しずつパシュトゥー語を話せるようになってきている自分や、毎日レイバーと共に砂埃の舞う広大な大地を足元に力仕事に精を出している自分が、何かいつもの自分とは違う別の人間のような気がしてしまうのです。つい半年程前まで東京のど真ん中で走り回り飲み歩いていたので、そう感じるのは当たり前なのかもしれませんが……。

「逆カルチャーショック」に期待

僕の中では未だ「非日常」が続いているのだと思います。赴任当初と比べると現地の風習や、食べ物にも慣れ、仕事にも慣れ生活の面では全てが日常になりつつあるのを実感しますが、どこか地に足が着いていない感覚は否めません。また、これだけの期間海外にいた経験は初めてで、最近、正直少し日本が恋しくなってきています。いつか一時帰国し、友人達にこっちでの出来事、感じたことを馴染みの居酒屋で一杯やりながら語る日を夢見ています。と同時にこちらから日本に戻る時に感じる逆カルチャーショックを味わいたいと思っています。そうすることでアフガニスタンの生活を見つめ直すことができ、再び戻ってきた時には地に足の着かない浮遊感が取り払われているのではないかと期待しております。

しかし小麦の収穫時期は待っていてくれません。個人的な希望は胸に秘め、気合を入れてこれから始まるJ地区のコンクリート構造物建設に取り掛かります。

木を育てつつ、人も育てば……

灌漑用水路担当　神戸秀樹

「自分で育てたものは傷つけない」

「植樹の仕事」は、簡単にいうと「木を植えること」なのだが、これがなかなか奥が深い。木の収集、場所の整地、溝作り、水遣り、人や動物からの被害防止など、様々だ。その中で、多くの時間を費やすのは、植えた後の維持管理である。これは、むしろ「育てる」と言ったほうが、ピンと来るかもしれない。「木を育てる」、これは、短期間ではできない息の長い仕事だ。悔しいが、一年関わった私でさえ、木の一生にとってはほんの一瞬に過ぎない。

そんなほんの一瞬、自分に与えられた短い活動期間の中で「では、どうすれば、図々しくも植えた木に長く関われるか」を一年以上考えてきた。最近、実践しているのが、木を育てながら、「人も育てる」作戦である。「人を育てる」というと大げさだが、要は、「どの木が、どこに、何のために植えてある」かを、仕事を通して、知ってもらい、一家団欒や礼拝の時など人が集うときに、多くの人に伝えてもらう。

こちらの人は、多くが話し好きだ。またおもしろいことに、何でも話にする。そんな、話題の一つになればいい。つまり、一種の「啓蒙活動家」。そんな人を一人でも増やせれば、と思っている。さらに、植樹、散水に携わる作業員や木を監視する見張り番は、「啓蒙」しやすいよう、できるだけ家の近い人を配置している。家の近くの木だから、と愛着を持って育ててくれれば……。「誰でも自分で育てたものは傷つけない」そう、願っている。

植樹の仕事の実績の多くは、色々な人の目に見える「支え」があってこそ、成り立っている。数ヶ月短期で手伝いにきてくれる人、見学とは名ばかりに作業員と共に、仕事をしてくれる医学生、ダラエヌールで桑の苗木を育ててくれている農業計画の進藤さん、ペシャワールで桑の苗木を育ててくれた藤田さん、オリーブ、桑そしてユーカリの交渉と輸送に対応してくださった事務所の芹沢さん、日本で、れんげの種を収集してくださった福元さん、中島さん、そして事務所、ドライバー、現場監督など多方面から関わる現地人スタッフ、こうした後方からの支援あってこそである。さらに、この三月に用水路を視察された、後藤会長をはじめ事務局、関東連絡会の方々、訪問者全員に桑の「記念植樹」をしていただいた。これには、目に見える支援と言うよりもっと強い「人のつながり」というものを感じた。用水路に水だけではなく、さらに日本で長く支援して下さっている会員の方の「気持ち」が通った瞬間だった。

柳もしっかりと根づき、護岸の蛇籠を抱きかかえている

これは、文字通り「木を植えた男」を指しての言葉だが、何も植樹の仕事に通じるだけでない。中村医師およびペシャワール会が行っている、長期的視野に立った用水路建設をはじめとする水源確保事業、農業計画そして医療活動すべてに通じる一節だと解釈している。そして、何度となく、その中に身を置く自分の励みにしてきた。そうした行いをする組織で、中村医師のもとアフガニスタンで二年間ワーカーとして働けたことを誇りに思う。最後になったが、今年植えたオリーブは、「平和と豊穣」の象徴である。アフガニスタンに戦争や旱魃（かんばつ）のない平穏な世の中が訪れることを願ってやまない。

最後になったが、植樹の進捗状況を報告したい。二月一日から三月一〇日の間での植樹は、以下の通り。

柳…三千本以上（すべて用水路での調達が可能）

オリーブ…一千本

桑（苗木、挿し木合わせて）……二千本

ユーカリ……一千本。

二年間、仕事だけでなく生活面すべてにおいてお世話になった中村先生、藤田さんをはじめ多くの現地ワーカー、私達の周りで、言葉にして話せない外国人の言うことを精一杯理解しようとし、また協力してくれた現地人スタッフと現地人作業員、日本で現地の私達の活動を全面的に支援してくださった事務局や会員の皆様、そしてイラクでの邦人拉致事件の後、悩みながらも送り出してくれた友達や家族、そうした人の協力なしにこの二年間はあり得ません。この場を借りてお礼を申し上げます。これからは、一会員として日本からできる限りの支援をしていけたらと思っております。ありがとうございました。

（神戸さんは五月で任期終了です＝事務局）

「木を植えた男」

長く支援する、長く活動すると言うことは、容易なことではない。『木を植えた男』（ジャン＝ジオノ原作）の中には、次のような一節がある。

「人びとのことを深く思いやる、すぐれた人格者の行いは、長い年月をかけて見定めて、はじめてそれとわかるもの。名誉も報酬ももとめないまことにおくゆかしいその行いは、いつしか必ず見るもたしかなあかしを地上にしるし、のちの世の人びとにあまねく恵みをほどこすもの」

結核コントロールプログラムと検査室

PMS病院検査技師　坂尾美知子

結核診断の指定医療機関に

PMS病院では、二〇〇五年からパキスタン州政府の結核診断、治療病院・診療所として指定を受けています。

それ以前は、結核と診断された患者さんは、センターやその他の病院・診療所に紹介され、そこで無料の治療薬をもらうことができました。この指定を受けたことで、結核と診断されれば引き続き当院で無料の治療ルートに乗れるようになりました。投薬期間は八ヶ月と長期に亘るので治療の継続には利用しやすいというのも大切な要素です。勿論（もちろん）当院で結核と診断されても、治療はよそで受けることもできます。

二〇〇五年一月から十二月までの一年間で、検

査室では延べ三七三名、九一八枚の標本の抗酸菌（結核菌）の顕微鏡的検査を実施しました。

その内延べ三八名、五七枚が陽性でした。（1＋）が二四名（治療中の五名を含む）、（2＋）が八名、（3＋）が六名、（4＋）が〇名でした。

投薬前の検査で陽性だった三三名の内、一〇歳以下に二名、一一歳から二〇歳までに一一名、その後は一〇歳毎に三名、五名、五名、四名、二名、七〇歳以上に一名でした。二〇歳以下が一三名と若年者に陽性が多いようです。年齢は本人の申告で、分からないと答えた方はその時受け付けを担当した技師が四五歳とか六〇歳とか判定しています。

細かい年齢構成はあいまいですが、若年者に多いと言えるようです（あくまでも痰（たん）の検査結果であり、全結核患者ではありません。排菌しない人、痰を出せない人、特に子供などは痰の検査は困難です）。

ＰＭＳ病院の検査室で働く坂尾ワーカー

実技も好成績

指定を受けている院所の会議が三ヶ月に一度、センターでもたれ、ＰＭＳからは医師、看護師、検査技師の三名が出席しています。会議では、私達検査技師は三ヶ月毎の検査結果のレポートを提出するとともに、疑問点を聞いたりアドバイスを受けたりします。試薬も一部提供してもらっています。

また、一度は顕微鏡の実技チェックもあり、参加したスタッフからは良い成績だったと聞いています。私も一度出席しましたが、その時は検査技師だけのミーティングが隣の部屋でもたれました。女性は私一人で、残り一〇名ほどは男性でしたが、チーフが女性だったので、そのすぐ側に座らせてもらえたので質問もしやすく幸いでした。事前に一応英語とウルドゥー語の結核プログラムの冊子も読み、気合十分で参加しましたが、気合の割りに会話についていけず残念です。会議に「参加した」といえる日がいつか来る、というのは夢かもしれません。

早期発見に尽力

現在検査室のスタッフは六名ですが、新人一人を除き全員で抗酸菌検査をしています。抗酸菌検査は三回を基本にしており、三回目の結果時に医師の判定となります。三回目はできるだけ早く結果を出す、入院患者は一回目をその日の内に検査するようにしています。全員が担当できることで、宿直の時間も利用でき病院業務はスムーズです。クリニック（診療所）でも対応できます。

この結核プログラムに参加したことで、検査室では記録簿の記載が向上しました。また標本の保管が確実になったことで再チェックが容易にできるようになりました。

日本の病院で抗酸菌の顕微鏡検査の経験は多少ありましたが、その時は陽性者が少ない、陽性であっても菌数が非常に少ないケースが大半で、根気と集中力が求められました。

しかし、ここでは陽性例が多く、またその菌数も多いケースが大半で、根気と集中力が試される前に陽性の結果が出ることが多く、顕微鏡検査の姿勢が甘くなりがちです。三回検査をする、時に再チェックを入れる、個人の責任と技術をはっきりさせることで、技術の向上に繋（つな）がると考えています。

そして、菌数の少ない早い段階で患者さんが病院を訪れることができ、その段階で検査の依頼がなされ、それに応え得る検査技術が定着すれば、と願っています。

診療所敷地から一歩も出ない月も

ダラエヌール診療所担当　紺野道寛

春を知らせるサソリ？

時が経つのは早いもので、現地で三度目の春を迎えました。「サソリにかまれた」という患者さんが来院するようになり、春だなぁ暖かくなったんだなぁと感じています。三年前のこの時期、ペシャワール会はおろか、中村医師のことさえ全く知らなかったことを思うと、今こうして現地にいるのがとても不思議な気がします。結局ペシャワール会のことをあまり知らぬまま、「誰もが行きたがらない所に行く」という言葉だけを頼りに、二〇〇三年の海外初渡航となり現在に至ります。それ以来、ジャララバード事務所、PMS病院勤務を経て、大半をダラエヌール診療所で、薬局勤務や受付業務をしながら過ごしています。

診療所では、急病患者は二四時間対応するというPMSの性格上、常時待機していることが求められます。一ヶ月診療所敷地から一歩も出ない月もあります。文字通り現地スタッフと同じ部屋に寝て、急患が来たら一蓮托生的に働きます。真夜中の急患対応の後、満天の星空に見とれすぎ風邪を引いたり、睡眠不足になり早朝庭に出てそのままチャーパイ（網ベッド）にゴロンとなる時もあります。シャワー中に呼ばれ慌てたり、でき上がったラーメンを前にお預けとなり、無念の奇声をあげることもしばしばです。

口論・衝突もコロっと忘れ……

生活していく上で距離が近すぎるせいか、スタッフと口論にもなります。また、疥癬やヘルペス、マラリアやアメーバ赤痢……などでも苦しみました。辛かった断食にも、自然な流れで参加していました。そんな訳で診療所勤務は、水路や農業など動きの激しいセクションとは、また違った意味でハード（？）といえるかもしれません。そう考えると、同じ条件で診療所勤務をするメディカルスタッフや門番のおっちゃんは、かなり頑張ってるんだなと思います。

そんな日々ですが、現地スタッフや患者さんとのやりとりでは、色々あり常に一喜一憂しています。我儘なスタッフに「やかましいわ、この」と日本語で怒鳴ったり、順番を守らない、理不尽なことをいう患者にムカッとしたりも日常的にします。

ですが二日三日もするとそれもまたコロッとスポッと忘れ、素朴で礼儀正しい山の患者さんに接し、ほんわかと嬉しくなる時もあります。診療所には、子どもから老人、遊牧民、軍閥の傭兵、政府役人、米軍兵士などなど実に様々な人が来院し、沢山の人に出会え、会話を楽しめます。中でも役得なことに、私は外国人男性ながらも受付業務をする関係で、毎日アフガン人女性を見て話す機会に恵まれ（勿論じろじろ見たり、必要以上の会話をしないよう気をつけています）、その顔の美しさとブルカの中の派手な衣服、押しの強さと粘り強さに「うーん」と圧倒され続けています。ちなみに、男性は女性より要領がよくあっさりしている気がします。そんな風に、強気で一方的で我儘だけどすごく優しい、とても濃い人たちに囲まれ支えられています。

小さな力になれれば……

正直なところ、この二年八カ月で、私が現地で何をしたかできたかと振り返ると大きなことはあまり無い気がします。しかし常にそこに居て、一緒に話して見て聞いて考えて働いたということが、何かしらの小さなチカラになれたのかなとも思います。PMSダラエヌール診療所が、色々改善点を抱えながらも、ただそこに在るということが地域住民の大きな力になっているように。付き合いの長いスタッフとは、深い信頼関係も生まれました。イスラムのこと、アフガンのこと、日本のことなど、日本に居るときには全く考えなかったこと、知らなかったことの多さにも気づきました。

今こうしてアフガンにいられること・ペシャワール会の活動を知り関われたことが嬉しいです。この機会を下さり、支えて下さっている全ての皆さんに深く感謝しています。本当に有難うございます。最後までベストを尽くしますので、引き続き宜しくお願いします。

二〇〇六年三月八日　ダラエヌールにて。

子供たちとの触れあいも大切な時間です

――諷刺漫画事件を憂いつつ

農業計画担当　伊藤和也

相次いだ侮辱事件

皆様いかがお過ごしでしょうか？　今年は気温の上がりが早くまた雪が少ないため旱魃（かんばつ）になるのではないかと心配しています。無事小麦が収穫できるよう祈るばかりです。

さて少し前ですが、ある北欧の国でイスラム教を侮辱するということがあったそうです。これは現地人がラジオで聞いた情報から聞きましたが、幸いこちらは大きな混乱も無く、以前あったコーラン侮辱事件のように大きなデモもありませんでした。

この事件を期に一つ疑問が浮かびましたので、いつも一緒に仕事をしていますファーマーに、もし日本で同じようなことがあったら日本人に対してどのような対応をするのか聞いてみました。ファーマーからは、「日本はそんなことをしない、日本とアフガニスタンは友人」との答えが返ってきました。それだけPMSの仕事を通して日本人に対して信頼していること、また日本に対して元々良い印象を持っているため、そのような答えが返ってきたのではないかと思います。

子供たちとも打ち解け……

ブディアライの農場で仕事をして一年以上になり、ファーマーだけでなく彼の子供達、孫達また近くの家の子供たちとも仲良くなり、男の子、女の子問わずよく農場や休息所に遊びに来るようになりました。特に子供達と触れ合う機会が増えたのは、ある程度信頼され、また同じ所でその家族とともに仕事をしているため得られたためだと思っており、自分にとっても大切な時間です。

私が彼に質問した理由は、コーラン事件に始まりイスラム教への侮辱といえる事件が続き、もし仮に日本でこのようなことが起こった場合、直接PMSが関係していないことを彼らが理解してくれたとしても、友人として信頼してくれている現地の人達を裏切る結果になりかねないのではないかと思ったためです。

このようなことを防ぐためにはどうしたらいいのか、考えさせられます。会員および支援者の皆様は中村医師の講演や会報を読まれた方が多く、テレビ、新聞報道だけの情報に疑問を感じている方もいらっしゃるのではないでしょうか。こちらは旱魃、異常気象の影響で、多くの人達が厳しい状況であることに変わりありません。皆様の引き続きのご支援と併せて、現地の厳しい現状、そして報道と現地の実情とのギャップなどに対する疑問等を、近くの方たち話し合うなどして実情への理解を広めていただければと願うばかりです。

アリアナ大地の心――2

歓待の心

甲斐大策

男達が援助トラックに殺到した。配布の小麦粉を激しく争う。子供達が泣き叫んでいた。日没に祈って後、翌日の誰かの死を予感する戦乱と飢餓の日々、アフガン難民地区でのことだった。一夕、そんな難民の一族は、私をもてなす席を用意した。そこには豪華な料理が並んでいた。泥壁を隔てて料理の行方を思い詰めているらしい子供達の気配があった。

アフガニスタンでは、ユウラシア全域ともいえる、厳しい自然環境と貧しさの中に生きてきた人々ほど、生命懸けで旅人をもてなそうと努める。その歓待を支えているのは、出合いが神の意志と信じる心であり、旅人にも迎える側にも完結している生と死への意識である。生死を同次元に意識する心は、不動の信であり覚悟であり魂である。

十六世紀末の日本列島でひとりの茶の湯びとは佛典から「一期に一度の会」と記した。その人物は、関白の権勢に阿らずその傲倨をなじり、切り刻まれて果てた。

六十数年前、絶望的な戦いへ向う兵士へ大半の日本人が、米櫃傾け持てる全てを差し出した。

しかし、武人に等しい茶の湯びとの心得が、覚悟が、大衆に届いていたとは思えず、戦時下の民衆の愚直なまでの思いが民族の骨肉になったとも思えない。

アジア内陸を訪れては、純粋素朴な鄙の人々の歓待を受けたと眼を潤ませ感動する、この無邪気で不遜な錯覚を我々はいつまで繰り返そう。暖衣飽食の日常に「一期一会」と「癒し」を口にしてはしゃぐ浮薄さをどうしたものか。

軟弱な私の精神が臆することなく、彼の地の人々の歓待を受け得るようになる日はくるのだろうか。

振り返れば充実した「地下室」の五年間でした

PMS会計担当　中山博喜

「レシートとは何であるか？」

PMS病院で働く頑強庭師アスラムは、となりのトトロという映画に出てくる〝ねこバス〟にどこか顔が似ていて、生まれたその日からたった今まで、ひたすらガキ大将を貫き通したようなワンパク顔のおとっつぁんである。

もうずいぶん前の話になるが、仕事道具を修理するということで、アスラムがお金を受け取りに来たことがあった。この病院の会計にはお金の出し入れについていろいろと細かく決められたルールがあって、たとえば会計からお金を受け取る場合は前もって使用目的を事務所に届け出た後、そこから発行されるリクエストを持参したところではじめて現金を渡される、ということになっていたりする。

なんだかまわりくどい言い方をしたけれど、つまるところ、リクエスト無しではお金が出ない、というシステムなのだ。やたらとまどろっこしい手順を踏んではいるが、このルールの背景には二十数年にわたるペシャワール会現地活動の汗と涙の経験に基づく〝知恵〟が隠されていたりするので、なかなかあなどれない。

お金を渡してながいこと日が経つが、とうのアスラムはいくら待てども清算にやって来る気配がない。これはイカンということで、彼を会計室に呼び出し、はやくお金を清算するよう紳士的冷静沈着に伝えたわけだった。

そうしたところおとっつぁんは突然シカメッ面になり、〝清算〟とはいったい何であるか、というようなことをこれまた冷静に尋ね返してきた。

私は彼の反応に少しばかり「ややや！」と驚きながら、それでもさらに冷静を装って

「それはつまり、レシートの裏にアナタのサインを書いて、おつりがあったらそれと一緒に私に差し出しなさい、ということであるぞ」

と、なかなか簡単明瞭に〝清算〟というものを説明したのだったが、その話を聞いたアスラムはワンパク顔をニヤリとさせて、大きな鼻からゴゴゴーと生ぬるい息を吐き出しながら

「それだったらワシはすでにサインを書いたのであるケッケッケッ……」

と、突き出た腹をさらに無理やり突き出して、椅子に座っている我々をはるか天空の彼方より見下ろすかのごとくそう言ってのけた。

我々は彼の自信に満ちあふれた発言に再び、

「ややや！」

とたじろぎながら、清算を済ませていないのにいったい何にサインをしたのだろうか、とすばやく頭を駆け巡らせ、どうやら彼はリクエストとレシートを混同して理解しているということに気づいた。

そこですかさず他の会計係が「ふっ」と口の端で笑いながら、アナタがサインを書いたのはリクエスト用紙であって、我々が今必要としているのはレシートなのである、というふうな言葉を「どーだ！　どーだ！」と決定的に浴びせたところ、おとっつぁんはマル眼をさらに大きくさせながら一言こう言い放ったのだった。

「そもそも、〝レシート〟とは何であるか？」

……あたりは一瞬スッと静まり返り、そのあと

「レシートを知らないんじゃあしょうがないではないか」

と根本的会話の不成立ぶりにどよめきつつ、そのまま一斉にワッと笑いの渦へと巻き込まれていっ

屈託のない庭師のアスラム

た……。

会計というところで仕事をしていると、こういういやはや的どうにも苦笑いだらけの状況というのに遭遇することがよくある。お金を管理する者としてはいささか困ってしまうわけだが、その苦笑いの中に、なんだか〝ビト〟としての大事なものが隠されているような気がして、不思議に心地よい気持ちになったりする。

ＰＭＳ病院の地下にある会計室で（右が中山ワーカー、左は後任の村井ワーカー）

「苦笑い」に人を学ぶ

私はこの春をもって現地活動を終了させていただくことになった。この数年間を振り返って、自分は何をやったのだろうかと最近になってしみじみと考える。

ここで鼻の穴などプクッと膨らましつつ、ニマリと笑えるような記憶が湧きおこってくるとこれはもうこの世の幸せとでもいえるのだろうが、あいにくのところどう思いを巡らしたところで、薄暗い地下の片隅で、湿り気を帯びたお札をうすら寂しく数え続けるというじつに陰惨な光景だけが、頭の中にどんよりと浮かんでくる。ところがこの思い出がまた妙に気持ちよかったりするところが困ってしまうわけで、これはきっと前に述べたような〝大事な何か〟がそう思わせているのかもしれない。

ＰＭＳでの活動を通して、そうした〝ビト〟を持った人々と苦楽を共にできた私は幸せ者であるなあ、と今更ながら深々とそう思う。そして、この〝ビト〟を尊ぶ活動が、今後とも末永く続いてゆくことを心の底から祈っている。

＊

最後になりましたが、現地でお世話になった中村先生をはじめ日本人ワーカーのみなさん。現場で幾度となく握手を交わし喜怒哀楽を共にした現地職員の同士たち。それから絶え間ない声援と支援を続けてくださっている日本事務局の皆様と募金者の方々。そして、私の現地行きをひたすら黙って見守ってくれた家族に、この場をお借りして、あらためてお礼を申し上げさせていただきます。

有り難うございました。（中山さんは三月で任期終了されました＝事務局）

アフガン版「竹取物語」その1

灌漑用水路担当　鬼木　稔

守衛小屋を建設

現在、主要な場所に一〇ヶ所、チョキダール（守衛さん）が配置されているが、何れもテント暮らしで、二四時間二名交替の勤務となっている。

取水口が一望のもとに見渡せる、一段と高い場所に建設場所を選び、四ｍ×六ｍの小屋の基礎を石組みする。基本的には、現地流の建設方法を踏襲するつもりだが、土壁には五パーセントのセメントを混入した、ＰＭＳ特製のハウラ（パウダー状の土）コンクリートを使用した。

連日泥を捏ねては積み上げて、両壁からはみ出した土を、垂直に掻き落とす。強烈な太陽と乾燥した気候風土では、一日おけば充分その上に積み上げが可能となる。ドアと二ヶ所の窓は、枠を土

スランプール地区にある三日月池の水門（左から中村、鬼木、藤田）

の中に塗り込めるのだが、想像以上に頑強である。

三m程の高さまで壁が積み上がると、いよいよ屋根の部分であるが、私にはどうしても屋根の作り方が解らなかった。メーソン（石工）の出番である。現地の人達の自宅は、自分達で作るので、皆手慣れたものである。

石と土に竹と籠（かご）、殆ど現場周辺で調達できる資材であり、購入が必要なのは窓とドア、それに天井の梁にする若干の材木だけであるが、材木は私達の現場から出る、廃材を寄せ集めた。こちらでは木材は少なくて貴重品であり、その分非常に高価なのである。

奥地行が思わぬ展開に……

たまたま竹の束を担いで休憩していた人に、どっから取ってきたのか情報を聞く。ここから歩いて片道二時間少々らしい。折悪しく明日からラマダン（断食月）入りとなるが、私の右腕であるメーソン頭のサディックに相談する。そこの場所は知っているらしいが、私は来ない方が良いとのこと。遠いし、きついから気を使ってくれているのだろうと思い、「なーに私は大丈夫だ」とばかり、一緒に行くことにした。私は四〇数年間も山登りをしてきて、今も現役なのである。

当日はサディックと六名のレイバーで、早朝に落ち合って出発、四駆車で行けるところまで、道なき道を選びながら進む。目的地は谷の奥にあるが、谷への進入口は開けていて、取水口現場のすぐ横からである。

しかし一五分ほどで谷は少し狭まり、そこから先は四駆車でも無理と判断、全員鎌を持って歩きとなるのだが、突然サディックが、私はここに留まるようにと制止する。そして懐から取り出したのは、何とピストルである。

危険が迫った場合はこれを使えと、撃ち方を教えてくれ、予備の弾倉まで私に押し付けてくる。一昨日私が下した解釈の、きついから来るな……、とは違って、奥の部落は危ないから来ないようにと言っていたのだ。

だけど、そうと知ると益々好奇心が増大する妙な性格（たち）で、きっぱりと私も同行すると言って、ピストルをサディックに返す。仕方ないと肩をスボめて、ピストルを腹に差し、そのかわり絶対に自分から離れないようにと念を押される。

やがて谷は縦横に石垣が張り巡らされて、今まで見てきたアフガンの風景とは異なっている。見返すと小高い丘の上には、見張り所と思える石積みの小屋が散見される。

思えば、取水口横の道路際から伸びている斜面の、山の頂上には警備隊の監視所が建っていて、そこに一度訪問したことがある。普段はよほど暇だと見えて、紅茶を出したり自動小銃や拳銃を分解して私に手ほどきまでして歓待してくれたものである。

その時、外にある銃座が目に付いた。普通なら道路側に向けているのが当たり前だろうに、この谷の奥に向けて銃座が据えられているのを不思議に感じていたことを、フト思い出した。さらに、チーフエンジニアが誰から聞いたのか、私がこの場所に竹取りに行くことを知って、しきりにやめた方が良いと忠告していたっけ……。

この奥にはやはり何かがある！　益々好奇心は膨らむばかりであった。（次号に続く）

▼事務局3階から6階へ移転しました▼

＊昨春、事務局が移転しました。同ビル内の引っ越しですが、お便りされる際は603号室とご記入下さい。

●現地訪問記

緑の谷と化すダラエヌール

ペシャワール会関東連絡会事務局
安藤由貴子

門前町の出現に歳月を実感

コートがまだ手放せない三月六日、成田空港から、関東連絡会一行四名は、後藤会長、井本副会長、事務局の福元さんとご一緒に、不安を交えた興奮を胸に抱えてイスラマバードへ飛び立ちました。

七日朝、PMS病院へ。一九九八年の開院式に参列したときと見違えるような佇まいに八年という時間がはっきりと見られ、病院内は勿論、患者さんやその家族の為に門前に店が並び、地域の中の病院という姿が確立されているのがわかりました。理事会、医局、看護師打合せに同席を許され、紹介して頂き、院内見学のあと、中庭で表彰式に列席し、病院を支えている多くのみなさんの自信に満ちたお顔をみつめました。

その後、月並みな言葉で言えば、夢にまで見たカイバル峠を越え、アフガニスタンに入国したときは、年甲斐もなく「ヤッター」という気持ちでしたが、そこからジャララバードまでの悪路のドライブは舌を噛まないように気をつけるほどの揺れと埃まみれでした。

スタッフの皆さんに迎えられ宿舎、事務所を見学。日本人的使い方を工夫しながら現地にとけ込んでいるのがみられました。

ダラエヌールの試験農園では、栽培されているお茶が、今年は美しい新芽が顔を出し、将来の成功に繋がる様を見ました。昨年はサツマイモを近所の人達を集めて食べてもらって好評だった由、東京の片隅で焼きいも会を開いている私にとってはうれしい共通点を見て、今年は同じ紅あづまの苗を植えながら、ダラエ・ヌールいもを話題にしてみたいと思います。

農場の説明をなさった担当の現地の方に、小さな男の子がぴったりとついて、父親の仕事ぶりをみていました。慈愛にみちた子供への生きて行く為の教育をしている父親の姿がわかり、思わず「あなたの夢は?」ときいたとき、「平和で日々の生活が営まれ、友達が遊びに来て語らうこと」と幸せいっぱいの顔をほころばせての優等生的返事にこれがほんとうの人間の生き方で、日本人の今の生活を考えてしまいました。

水路の見学は今まで中村先生の講演会でスライドで見ていたものを目の当たりにし、我が身に近く感じられ、どこの場所に行ってもただただスゴーイスゴーイの連発でした。中村先生がユンボの運転をしていらっしゃるところでは、真剣な中にもご満足気で得意気が滲みだしたお顔をみて、思わず微笑んでしまいましたが、この国では女がやたらに笑顔をしてはいけないと戒められました。この国の女性は表面的な表現はしなくても男女不平等ではなく自然環境の経験から土に根をおろした考え方をしているのでしょう。

蛇籠作りを近くで見たり、丘に登っては一面の沙漠だった所が今や麦の緑が波をうち、ダラエ・ヌール（光の渓谷）が今まさに緑の渓谷に変わって行くのを確信できました。が、これからも各面で大変な仕事であることも実感しました。

「PMSは不滅です」

同行の一人は、ペシャワールの病院の中庭の美しさにひかれ、ノーブルなバラの育成がよく、手入れが行き届いているのにびっくり。ジャラカンダの木は、その花の美しさにわざわざツアーを組むほどのものが見事に育ち、ジャララバードのスタッフの庭も農家の塀際も植物を愛しているのがありありとわかったと感心していました。

水門に桑の木を記念植樹したこと、スタッフの方々との交流、病院の庭で女性患者さん達とトンチンカンな会話をして肩を抱き合って別れたこと、軍のヘリコプターが現われ、体をゆるがす爆音に思わず腰をかがめたこと、子供達が日本のランドセルを肩に学校へ行く姿、どれも忘れられない思い出です。

朝五時出発のときの星空に流れ星を見つけ思わずこの国の幸運を祈り、そして「PMSは不滅です」と叫びたくなりました。

現地スタッフの方、過酷な中で笑い合い、信じ合ってがんばっている日本からのワーカーのみなさん、お世話になりました。藤田院長代理に女性陣より感謝と大きなエールを送ります。

●事務局便り

＊三月八日アフガンに入ると、国境トルハムの町の風景が一変していた。中古車の部品が山と積まれ、道の両側にあった掘ッ建小屋のバザールがさら地になっている。再開発してビルが建つという。道路工事も本格的で、行政権力が強くなっているのを感じる。

農村部では、昨年同様ケシはなく緑の麦畑が拡がり、ユーカリの林では、のどかに蜂の巣箱を見まわる家族がいる。昨年の同時期より桑の芽生えも早いようで、新緑が美しい。ジャララバードに近づくと、スピンガル（白い山）山脈が銀色に輝き、ダラエヌールの水源ケシュマンド山系も白く、すこしほっとする。町中にはいると車の喧騒と新築ビルのラッシュに復興景気の熱が伝わる。

一夜あけると緑と雪山の風景が、表面的なものでしかないことを知らされる。緑と雪はこの一週間に降った雨のせいで、昨年より雨は少なくこのまま行けば凶作になる可能性があるという。ダラエヌールの扇状地の天水だのみの畑には、実りそうもないひ弱な麦が風に揺れている。

しかし希望がないわけではない。昨年までは、埃だけが舞っていたスランプールの大地が、用水路の水で、きちんと整地された緑の広大な麦畑になっている。そのコントラストに、しばし言葉を失う。現場では、中村医師を先頭に日本人ワーカーと現地の人々が、実りへの灌水のため、休日返上の突貫工事に励んでいた。緑が甦った麦畑では、十数人の村人が集まり「水争い」も見られた。「水あればこそですね」と言うと、中村医師が深く頷いた。

㋑村から――――――――――――♬

私が事務局にお手伝いにくるようになってからいつのまにか四年半。私の主な仕事は全国からお寄せ頂く支援へのお礼状書きと会報発送の作業です。お礼状を書きながら郵便番号がわからず、番号簿で調べても町村名が見つからない時、ああここも合併で変わったのかとちょっとした社会問題を考えます。会報発送の作業もずい分変わりました。封筒に切手を貼って一斉に送るというやり方から、郵便番号別に区分することで割引料金となり、かなりの経費減になっています。全国から送って頂く未使用切手は、同一金額のもの五十枚を一枚の台紙に貼り、現金と同じに使わせて頂いています。近頃嬉しい事に仕事に追われず、ゆとりが出てきました。事務局の皆の創意工夫と確かなコミュニケーションによるものと思います。仕事の進め方は少しずつ変わりましたが、少しも変わらないのは出来る時に出来る事をという素朴なやり方、そしてその小さな力が集まってペシャワール会の事業推進のお役に立っているなら、本当に嬉しいことです。（T・K）

中村哲医師の本

空爆と「復興」

―アフガン最前線報告―

9.11テロ直後から2003年末まで、中村医師と現地日本人スタッフから届いた、鬼気迫る活動報告集【2刷】1890円

辺境で診る 辺境から見る【3刷】1890円

＊中村ファンが圧倒的支持＊

ダラエ・ヌールへの道【3刷】2100円

医者 井戸を掘る 1890円【10刷】

医は国境を越えて 2100円【6刷】

ペシャワールにて 1890円【8刷】

聖愚者 甲斐大策の物語

「表紙をめぐる小さな物語」が、書下しを加え一冊に 1890円

石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24 TEL 092(714)4838

ちくま文庫

アフガニスタンの診療所から 609円

筑摩書房 東京都台東区蔵前2-6-4 TEL 03(5687)2670

価格はすべて税込価格（税5%）です

会則

①本会の名称をペシャワール会とする。

②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行なうことを目的とする。

③本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。

④会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。

⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。

⑥本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。

⑦本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。役員の改選は毎年総会にて行う。

⑧毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。

⑨本会の事務局をFARAHOUSE（〒八一〇―〇〇四一福岡市中央区大名一丁目一〇―二五　上村第二ビル六〇三号 TEL七三一―二三七二）内におく。

発行所●ペシャワール会　〒810-0041　福岡市中央区大名1丁目10-25　上村第2ビル603

☎（092）731（2372）FAX　092（731）2373　郵便振替　01790-7-6559

発行日　2006年4月1日　No.87　会長 後藤哲也　現地代表 中村哲　事務局長 村上優　名誉会長　高松勇雄